The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文藻
Author(s)	秋月, 胤継; 吉田, 鋭雄; 武藤, 甚 他
Citation	懐徳. 1943, 21, p. 39-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文藻

新嘉坡攻略

敬軒　秋月胤繼

其一

倨然盤踞據金湯。積惡多年逞鴟張。天定勝人時正到。神兵一擊屠豺狼。

其二

陸海皇軍百鍊堅。戰攻必勝向無前。可憐驕虜皆雌伏。掌握大東洋上權。

哭黃裳中井先生三首

北山　吉田銳雄

隱操堅持善養眞。今茲八十九齡春。常言壽百應期望。何料俄爲帝僕身。

祇承祖志住嵯峨。八十年來入夢過。遺恨素心終不果。泣看千字雜吟歌。

昨夏同人啓壽筵。今年亦樂繼前緣。槐花將發期方近。底事空辭上九天。

哭黄裳中井先生

東邨　武藤甚

操持貞白似神仙。詩賦清純高壽年。何事溘焉騎鶴去。燈前揮涙誦遺篇。

戰ひの秋

音代節雄

秋のみのり今ゆたにして神國の大天地のおだしきところ（神嘗祭）
戰へる國の使命を遂げしむとゆたけきみのり神授けましし
上陸を企つえみし舟のむた水屑となしつ我防人は
肅として觀衆威儀を正しけり元帥の英姿映るたまゆら（山本元帥）
みんなみの潮の八百重の八十島に皇軍は今し戰ふ

○

仲田應弘

みささぎに伏しをろがめる先生を心迫りて見守る我は（長屋王墓）
赤襷かけしままにて召されゆく像ををしむと炎天に立つ

玉串を捧げまつりて今日よりは召されゆく像を正目にぞ見つ

二十一のつはもの君は敵地にて自(し)が咽喉に向ひピストルを撃つ

水鉢の水清らけくかかるもの意識せずして生活したる

天誅倉を訪ねて

入江來布

龍神街道夜行福井村より切目辻、柿硲(かきさこ)峠

夕灯黍にあてたる街道や

山霧に水鶏の夕を鳴きかゝる

山霧や秋の青田(しょう)に立ちのぼる

文月や霧の中より月出つる

龍神山峽小又川畔に文久三年水郡長雄等七志士が幽閉せられし天誅倉あり

水郡長雄が倉の柱に書き遺せし歌「皇國のためにぞつくす眞心は神やしるらん知る人ぞしる」村民大切に保存す。

蒼々と天高き日となりにけり

附近囑目

山歸來掘りしに秋の日南かな
葛の葉のおもてをうらを山畑
梶の葉や秋の句一二書きしより
螢袋畫を山路の涼しさよ
沛然と夕立しけり霧の山

龍神宿舍ゑびすや、李氏題して飛翠樓といふ。

へう〳〵と夕霧はしる涼しさよ

雜吟（尙書正義）

禹貢

日盛りや端山に遠く岳鴉

五子之歌

剪定の生籬見えて夕立てり

咸有一德

秋風や人は昔を劬はるゝ

○盤庚

古郷の夢を砧に懐しむ

○說命

星を吐く仙人ありと門すゞみ